

日本の國體と日蓮聖人

名一 王佛一乘論

上等クロス美本、四六倍大形五百二十七頁◎定價金貳圓五拾錢、送料内地金拾八錢◎振替口座番號東京貳八六六

本書は日宗隨一の碩學清水梁山師が多年の蘊蓄を傾け一代の心血を注がれたるも希有の一大著作なりとす若し其の三種神器の關係等は學界を動かすに足るの新説にて釋尊の祖は日本人識驚くの外なし實に數百千年間未だ曾つて一日本國體の真相は本書に於て方めて發揮せられ、日蓮聖人たびも顯れざるの王佛一乘論は茲に正さに新曙光を放たれぬ、世の政治家讀むべく、教育家讀むべく、一般國民亦須らく襟を正して讀むべし、特に日蓮聖人の末流に在りては僧俗を問はず必ず本書を指南として以て現代思潮の救済に資すべし、嗚呼方今政教の大事豈本書の旨に過ぐる者あらむや。

發行處

名古屋市東區高岳町二丁目

慈龍窟

(振替口座番號)「東京二八六六」(電話番號)「三四一九」

統一

號百二第

日蓮上人の苦樂に對する見地

大僧 正小林 日至師

國家と軍人と日蓮上人

海軍大佐 佐藤鐵太郎君

佐渡の靈蹟

帝國大學史料編纂委員 鷲尾順敬君

佛教統一と日蓮上人

顯本法華宗 今成乾隨師
大學林長



大聖日蓮云く

日本國一時に信ずる事あるべし、爾時
我も本より信じたり信じたりと申す
人こそおほくをはせずらんめとおほ

え候（上野抄
一五五三）

日蓮上人の苦樂に對する見地

九月二十三、日蓮草吉野町圓覺寺中親善會
に於ける講演の大意也。標題は記者の隨意
に、文意或は明瞭ならざる點ありとせば其
以、記者の責に在るものとす。三、上、生、記

大僧正 小林日 至師

久しく當寺へは参りませんで、申上たい事は種々
ありまするが、今日は簡單に諸君の修養になることを
御話し致しませう、

廣く世の中の人を見ますると種々に變つて居るが、
大體善人と悪人とに分れて居つて、是々の人は善人で
是々の人は悪人と云ふことになつて居る、悪人は多く
の人に忌み嫌はれますが善人は何となく慕はれる、
其善悪と云ふ區別が付きますることは、雪と墨との異
目の様でありませ、それで人は始めより茄子と瓜の種
の異つて居る様に、善悪の區別が出来て居るかと思ふ
ことを考へねばならぬ、昔しの宗旨に法相宗と云ふの
がある、この宗にては善悪の區別を立て、居るが、い
かに身體を解剖しても精神を調べても善悪の區別は見

出されない、凡そ人は物心が付いて、こゝに善悪何れ
かに分れるものでありまして、それは人間には好きな
こと、嫌なことがある、好きなこと、云ふのは愉快な
樂みに逢ひたいと思ひ、嫌なこと、云ふのは苦痛を免
れたいと感ずるので、雙方共に苦を免れ樂を得たいも
のであると云ふのであるが、心に欲ふ所の樂と心
に忌み嫌ふ苦みとの、取り方の後先が大事である、其
思案の瞬く間に善人と悪人との區別がつかまするもの
であります、それは一方は一刻も早く樂を取ろう、後
で苦しくなつてもかさはないと云ふ、一方は苦の關を
越へてから樂を得やうとするのであつて、斯様に苦樂
を先後にする其處に於て、人間の境遇も品位も變るこ
とになるのであります、然らば兩者何れが善人になる
か悪人になるかと云ふに、私の見ます處では、樂を
先に得て面白く世の中を送らうと云ふ者が悪人になる
様である、彼の盜賊が金や品物を奪ひ取りて一時の情
慾の樂を得様として、後に來るべき懲役と云ふ苦みを
思はない、實業家の子僧などは、多年身を苦しめ實業

上の修養を賜んで、而して後其志す所に進むのであるから、即ち是は苦みを先に、て樂を後にする者である。されば苦樂の先後に就ては、人生生活の第一歩に於て決定せねばならぬ重大の問題である、

こゝに上人の御趣意は人の此世に處するに當りて、其何れを先にすべきかと申すするに、只今讀み上げました開目抄にあります通り

日蓮が流罪は今生小苦なればなげかはしからず、後生には大樂をうくべければ大に悦し。

と、今法華經を弘めて迷夢の人心を醒まそうとした、めに、この風は荒く降り積もる雪の佐渡へ流罪の身となりて、苦しいことは苦しいが、後生には成佛の覺りを開いて大なる樂を得ることが出来るので、苦しみも苦しみとは感じられない、實に悦ばしいことであると仰せられてある、即ち日蓮主義は樂を後に取り苦みを先に忍ぶと云ふ御主義であります。

この御主義に就きましては、遠く我が釋尊の御身に考へなければならぬ、皇太子でありまして遠からず御子であつたならば、何うして世界の大偉人となることが出来ましようぞ、

今の世の人は若い時に樂をせんければ、年を老つてから出来ぬと申して一時の樂みに耽る人が多い、がそふ云ふ人は無理がある、無理に面白いので苦みと云ふ魔がある、即ち良心の呵責をうけて心安らかに治まらない、丁度盜賊が警官が来れば暢氣に歌をうたつて居るのでも驚いて顔の色が變るやうなものである、若し先きに苦んで働いて置いたならば、後に安堵して樂みの境涯に居ることが出来る、彼の基督なども十字架になつて教の爲に犠牲とならば、天國へ生れて神に仕へて樂みが出来ると云ふのであるが、是等は教の上から見ますれば、丁度屈歩虫が木登りする様なもので、天に生れた人は天の樂みを終つて仕舞へば人間以下へ墜る譯である、梁の武帝は支那の佛法が盛大なる時代の人でありすが、四月八日は釋尊の誕生日でありするから、邸内に高樓を立て、天に向つて誓願をしたことがあつた、即ち其語には、寧ろ提婆達多となりて無間

即位遊されて天子の御位に即くべき御方である、位の方より云はゞ人間の最上位に在りて人より尊敬を拂はれ、亦御父淨飯王の思召によりて四ヶ所の離宮を作られ、春夏秋冬の花開き芳香は匂ふて、人間の欲望の満足を得せしむるの設備は調うて居る、さらに后耶輪陀羅女を始めとして多くの美人傍らに侍して給仕をして居るので、何に一つ不自由な不足な事とてあらう筈はないが、悉達太子はこの一切の設備あるをも悦ぶ氣色はない、我今この國の太子として諸種の欲望の満足を

得ることは容易であるが、青春紅顏の時もいつしか過ぎて、死の斷案に近よるべきことであると云ふ分別を起しましたのであります、さればこそ十九歳の御時、夜半密かに王宮を脱け出で、檀特山に入りました、一麻一米を食して瘦せ衰へながら、修行すること十二年、阿私仙人に仕へて難行苦行を致されたが、御歳三十にして宇宙の眞理を悟り賜ひ、天上天下唯我獨尊と宣べ、横説聖説五十年にして衆生成佛の直道を説かれたのであります、若し釋尊が一皇子の悉達太子

地獄に墮つるとも、天界に生るゝを欲せずと云はれたが、天へ生るれば亦再び六道輪廻の法則によりて人間以下へ墮ちるから厭だと言ふ譯なのであります、凡そ物事と申すものは、不遇と云ふて満足も樂みも盡さざるものでなければならぬ、されば六道輪廻の境を超へて永久の樂みに入る様に心懸ねばならぬ、日蓮上人の御言に、

世すでに末代に入て二百餘年邊土に生をうけ其上下賤其上貧道の身なり。輪廻六道の間人天の大王と生れて萬民をなびかす事。大風の小木の枝を吹がごとくせし時も佛にならず。

と仰せられてあります如く、人天の大王と生れても六道輪廻の状態に在りては不退の覺位に到ることが出来ぬ、それ故に日蓮上人は、三類の強敵も惡魔の誹謗も何の苦みとは御考へなさらぬで、彌々強盛に法華經の行者たるの面目を發揮せられたのであります、即ち開目抄に、

今度強盛の菩提心ををこして退轉せしと願しぬ

と仰せられた如く、いかなる艱難に逢ふとも退く心なく、強烈なる大菩提心を起して修行の苦みを積まねばならぬ、眞實に永遠の快樂を得様とするならば、御題目を唱へて功德を得なければなりません、而して其修行に依りまして成佛得道を得ました上は、再び六道に輪廻して迷界をさまようことはない、上人の御主義は現在に偏せず未來に片寄らずして適當に融合せられ、現在生活の其まゝに於て誤りのない修行をして参りまするならば、そこに常樂我淨の境涯に到ることが出来る、多くの信者は信仰の根本を失つて居るから、屈歩虫の如く容易に佛果は得られない、信者も學者も其極意を得なければならぬ、佛果とは一たび得たる幸福を永く永く失はぬと云ふ事でありますから、諸君は、今何れの惡道にか御在すますらん。

と申された仲間に入らぬ様心懸けねばなりません、諸君が至誠の信仰に住して修行を致しまするならば、現在には諸天に守護せられて佛果を得べきことは疑ひないのであります、上人は

國家と軍人と日蓮上人

(九月十日千葉縣會風會(原支)部秋季講演會に於ける講演也)

海軍大佐 佐藤鐵太郎君

今日は御招待に依りまして此處に参ることにになりましたが、元來私は宗教の方面に於きましては初心の者でありますので、斯道に造詣深き各々方の御臨席をも顧みず、講釋がまじき事を致しますのは恐縮の至りでありまするが、本多祝下よりの御指名に預りましたる以上は、御辭退申上べき言葉もありませぬので、殊に各々方の御注文が軍人であることが必要の如く伺ひましたので、御招待を快諾致しました次第であります殊更今日一種の快感に堪へませぬのは、日蓮大上人が惡逆無道なる北條氏に取り入り自分の威福を肆にせんと致しまする俗僧原の讒言にかゝられ、鎌倉問註所に呼び出されて大獅子吼を發せられた日に當りまするので、この記憶すべき九月十日は、日蓮大上人の御肉身の爲には首の座にまで御座りになるべき運命を甞し

我法華經の信心をやらすして靈山にまゐりて返てみちびけかし。

と仰せられて、信心さへ確かで、間違いがありませんければ、靈山に法樂を得ることが出来ること云ふ意味合でもありません、法華經の功德は六道を通り越し最上の境涯に到ることが出来るので、そこが即ち妙法の妙の義理である、不可思議の力用を備へて居る、それ故に諸君は、先づ日蓮上人の如き御方を模範とし手本として其精神の方へ御供をして行くなれば人生に處する道に少しも間違がない、

そうじやから諸君は、一時の樂みを貪りて永遠不滅の樂みを得ることを忘れてはなりません、この事は人が人として一番先きに注意せねばならぬ重大な事でありまするから、先づ苦みを先にして後に樂みを得ることとに定めて、佛の御教の信仰を歸むことに精を出して頂きたい、これは諸君の御身のために御勤め致す次第であります、

たのでありまするが、上行の化身たるべき御任務はここに致して彌々明白になりましたので、法の爲には誠に欣ぶべき日に當りまする、又明後十二日は首の座に座られ奉行何處に通じたまふや、予は大事の四人にあらずや、何故遠く逃んとはするぞ、夜明けなば見苦しからん、早々寄て斬り候へ」と、高らかに仰せられた日に當りまするが何と云ふ痛快な事でありましよう、何に致せ、如此難有記念日に於て——僭越ながら此演壇に上りまするのは、此上もなき愉快でもあり光幸でありまする、則ち私は今日この處に於て自分の所信を述べまして、遠く大上人の御機嫌を伺ひ、近く先輩諸君の御批判を仰がんと欲するのであります。

そこで私の演題は別にこれと申して定めた譯ではありませぬが、唯だ何となく國家と日蓮上人との間の事を申上げて見たいので、元來私は軍人の事でありますから、其思想は又自から軍人的でなければならぬのでこの三つの間には何か關聯がなければならぬと思ひましたので、何となく先ホソやりと國家と日蓮上人の間

に軍人が入りまして、一方には國家を看一方には日蓮上人を拜して見ようと思ひ、其事を本多祝下に申上げましたら、立派な演題として御通報になりましたさうで御座りまするので、爾々さう云ふ事に致さねばならぬことになりました次第であります、從て丁度試験問題を戴てそれに對し答案を呈するが如き鹽梅になりましたので、或は題意に局限せられはせぬかと云ふ觀念もありますが、畢竟落第と覺悟致しまして思ふ存分の事を簡單に申上ることに決心致しました、

私は元來軍人でありますので、國家と云ふ問題を學問的に研究致した事はありませぬが、何に致せ職務が職務でありますので、曲りなりにも國家と云ふ者は全體何う云ふ者であるかと云ふ事は考て居ります、如何せん西洋の學者でも支那の先生達でも、自分の考に適合する如き解釋を與へて呉れませぬ、學者の研究としては研究の方面は幾らもありませぬが、軍人の國家觀は命懸けであります、自分の生命を投げ出して守るべき國家の事でありますから何處迄も眞率

でなければなりません、ふや／＼では立派なる決定を得ることが出来ませぬ、到底一個の學說を發見致した位では満足が出来ませぬ、其處で私は別に煩悶は致しませぬが、常に氣を附けて國家觀の養成を心懸けて居たのであります、最後に法華經を讀みまして、靈氣ながら考て居りました思想に決定を與へて貰ふたのであります、法華經の拜讀は私の爲には非常なる樂となりましたので、諸方面の疑團に解釋を與へて分明ならしめたる大光明であつたのであります、

「彼の國に好かりし法なれば此國にも好かるべしとは思ふべからず」と、日蓮上人も仰せられたる如く、國家の成立が違へば國民の觀念も異なり、軍人の國家觀も亦從て同一と云ふ譯には参りませぬ、宗旨を根柢に置きました國家は護法の爲に死ぬのが幸福である、また個人の利益を保護する爲に成立したる國家の軍人は、各自の利益幸福の爲に戦ふのであります、露西亞の軍隊の先頭には、十字架を捧げた僧侶が突進するのは護法の觀念を表するので、天子は護法者なりとの意

義より出たのでありませぬ、共和政治國の軍隊は、個人の利益を保護せんとする主義の轉化でありまして此主義を守り亦此主義の發展を天職と心得て戦ひますので、其結果は他民族の滅滅を意味せざれば已まぬので、從て亦同民族の絶滅を意義するのであります、之等の關係をヨウク考へて見ますと、皆悉く割據的を至正至公と云ふ譯には参りませぬ、何うしても至純至精なる人道より見たる正道を進むものとは謂ふ事が出来ませぬが、是れ皆國家其もの、成立が正くないので形正からざれば影も亦正からぬ道理であります、尊氏の家來は如何に忠義を盡しても、誠の忠義と云ふことが出来ぬと云ふ様に、國家が正からざれば國家の爲に如何に忠節を盡しても、本統の道に協ふとは申されませぬ、この道理を考へて見ますと、云ふに謂はれぬ味が出て参ります、果して如何なる國家が眞の國家かと云ふ判断が、先づ第一に必要なことゝなるのであります、

此點に就きましては、私はたゞ何となく我帝國を以

て此上もなき立派なる國體を有する國であると考へましたので、其理由は開闢以來君臣の分定まり、萬世一系の皇統を戴くと云ふ點にあると考ふるのであります、其れが何故に眞の國家かと云ふ點に至りましては、ただ／＼何となく物足りないのであります、然るに法華經に於ては「我成佛已來甚大久遠壽命無量阿僧祇劫、常住不滅」としてありますので、私も壽命品を拜讀致しまして無限の感に打たれたのであります、過去にも生ぜざればこそ未來にも滅せず、過去にも滅ぜざればこそ未來にも生ぜぬのである、本來より現在し賜へる如來は未來永劫生死あるべき理由がない、其間に生じたまへる諸尊は、衆生を化度せんが爲に此世に出現せられ、假りに滅度を示して厭怠の念なからしめ、常に戀慕の心を起して渴仰恭敬せしめらるゝのである、如此玄妙不可思議なる大作用は、實際上我帝國に實現せらるゝので、この一事より見れば、法華經は實に我帝國體の解釋である、今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子而今此處多諸患難唯我一人能爲救護」と云ふに

至りましては、我國の如き御國體でなければ此の經文の解釋の出來ぬのみか、到底衆生の安穩幸福を期し難きの意味合がハッキリと解りまするので、其の普遍的にして局限的の性質を有して居りませぬ一事に至りましては、提婆が成佛する、聲聞緣覺悉く皆成佛する、八歳の龍女も成佛する、山川草木有情非情皆悉く成佛する底の大作用を有せらるゝので、此意義に於て我御國體と融合するのは實に奇異の感に打たるゝ位であります。

如斯大意義は革命の意味ある國家にては到底思もよらぬ事でありますので、千年萬年の後、此の世界が渾然融和して一國となりまする以上は、無始無終常住不滅の如きが、此三界は皆是我有なりと仰せられた如く、無始無終常住不滅の意義を有する國家が、世界の融合に關し能化の天職を全ふせなければならぬので、他の意義ある國家は、如何にするも所化の立場にあらざるを得ざるは明かなることゝなるのであります、人に依りては、國家は一も二もなく分立を意味する

し」なども、この間に在する一種の靈感、明かに上人の頭上より發せられて吾々に達するのであると私は考へます、則ち我國の御國體は法華經に依りて彌々明白に説明せられ、日蓮上人により我國の如き關係にして始めて法華經と融合すべく、我日本は即ち是れ世界である、固より餘所八萬の國々の如き分際ではないと云ふことを説明せられてあるのであります、何に致せ革命の意義ある國家は、眞の國家ではありませぬ、反亂も篡逆も公に行はるゝ國で、法華經の意義に協はぬ國家であります、從て革命の意義ある國家に法華經の流通せぬのは無論の次第で、世界統一の意義を有する宗義が分立の意義ある國々の間に行はれ得ざるは勿論であります、從て我國の如き國體を有するに於て初めて行はるべきであつて、法華經は我國を以て發展の基地として世界に擴布せらるべき運命を有するのであります「佛法は東土日本より出べきなり」との觀念は、則ち日蓮上人の深く信じて疑はざりし所であります、私が先年御國體に關する信條を發表致しましたる際

ので、この分立したる國家は其存在の意義の如何に關せず、悉く皆平等なりと信するものが多いため、我帝國も他の諸國と同様分立以上の意味を含みぬものと考ふる人が多いためであります、さればこそ世界的教義專ら人類の教義を有する宗教は、國家の存在と相容れぬ從て國家的宗教なるものは決してないと論ずるものもあり、國家の分立は宗教の統一と没交渉なることは、假令ば甲乙兩者は全然分立したる箇體なるも、共に同一の宗教を奉ずるが如しと云ふものもあるものであります、從て宗教を以て起國家の意義ありとし、教界の偉人を以て起國家の思想を有するものゝ如く考ふる人もあるのであります、是等は必竟法華經は我國體の解釋である、我國家は其存在の大意義に於て法華經を色讀しつゝありとのことを考へぬからでありますので、此意義は日蓮大上人が既に業に充分に説き置かれてあると私は考へます、「日本一州は印度震旦にも似す一向純圓の機なり」日本國は一向に法華經の國也」は則ち是れであります、「一闍浮提第一の本尊此國に建つべ

には、先輩の方々は存じませぬが、同僚のものなどは一篇の好辭令位に考へ、一向振り向きも致さぬのでありましたが、此頃は先輩の方々の御指導に依り種々の事も明白になり、同僚間の思想も大に進歩致しまして我國體の崇高無上なる意義も段々と明瞭になり、自然に我國の天職を感得する事になりましたのは、誠に以て芽出度次第で、之れ偏に法華經の力、日蓮上人が栽培し置かれた種子が、段々と花を開き實を結ぶ事になるべき様子であらうと考へますと、云ふに謂はれぬ快感を催ふのであります、で今日に於きまして申上ぐるのは無孟の如くにはあります、我國の歴史を見ますと、法華經の流通が全國に遍く、我等同胞の祖先は靡然として皆法華經の人となつたのでありましたが、天に二日なく國に二王なしとの意義が、何となく不明瞭となるに及び他の雜然たる宗義が起りまして、御國體の光輝は「スリガラヌ」を通して眺むる如き有様となりましたので、魅魅魍魎の如き惡思想が、彌々益々發達するに至つたのであります、我日

本は一時の時代思想のみならず國家的思想に大變化を起し、一時は其危害誠に恐るべく佛教の中毒とも云ふべき有様となり、御國體に對する觀念などは殆んど亡くなつて仕舞つたので、其極端とも稱すべき場合に、日蓮上人の御國體中興論を發揮されたのであります、是は如何にも痛快な次第であります、如何せん妙法の弘通は他の宗旨の廢絶を意味するのみならず、鎌倉幕府其れ自身の存在を許さぬので、言ひ換へて申しますれば、常住不滅を意味する唯一の轉輪聖王を認め、其他を認めぬので、法華經の弘通は潜越を極むる北條氏の存在を許さぬのであります、多くの人は良觀等の俗僧のみに惡名を附するのであります、畢竟真き者同志が攻守同盟を結んで日蓮上人に抵抗したと云ふ次第で北條の役人は如何に日蓮主義に屈服しても幕府の滅亡には易へられぬので、ア云ふ事になつたのであると私は信するのであります、此處の道理を考へて見ますれば、日蓮宗が征夷大將軍を理想とする足利氏にも織田氏にも、又徳川氏にも容れられさせぬは自

産業者皆實相と相違背せず」と仰せられたるが如きも同じ思想であるかと考へます、「法は必ず國を鑿みて弘むべし、彼國に好かりし法なれば此國にも好かるべしと思ふべからず」と仰せられたるが如き、また「日本一洲は印度震旦にも似す一向純圓の機なり」と仰せられたるが如き、種々の御妙判を拜し奉りますれば、日蓮主義—國家主義—眞國家—日本と云ふ鹽梅が明瞭に解釋し得らるのであります、他の宗義の批判を致す譯ではありませんが、假令日蓮主義の他の要素にして他の宗義に合するものありと假定致しましても、この意義に於ては日蓮主義特得の者なりと私は信するのであります、方便としては「聖壽の無疆」と「國運の隆盛」とを齎るのではありませんが、其根本義に於ては果して如何なる者でありましようか、此等の者より考へて見ますれば、根本的に我帝國の御國體と相冥合し、王法佛法に冥し佛法王法に合すと申すべきは、獨り法華主義則ち日蓮主義のみであると考へますので、此意義に於て日蓮上人は釋迦如來の御教識を更に向上せし

然の結果であらうと思はれますので、法華經の主義は如何にするも、明治の昭代の如く民に二主なく國に二王なく、諸の小王を廢して唯一主を立つ、王は本より一統なりとの日蓮上人の御主張の如きに於てこそ充分に發展すべきので、如此難有御代に於て四十餘年も碌々として發展せざるが如きは、如何に他の酌量すべき事情なきにわらずとは謂へ、必竟日蓮宗各派の方々の御精神が充分でなかつたのでありますまいか、此點は如何にも潜越にあります、腹藏なく所感を述べれば實に右の通りであります。

元來日蓮主義は、宗教と道徳とを克く融合せしめたる宗旨で、一面に於て國家主義であり、眞正なる國家を得て是と融合し未來の大發展を豫望しつゝ、起ちましたる宗教であります、日蓮上人の仰せに「國は法に依て昌へ法は人に因て貴し、國亡び人滅せば佛を誰か崇むべき、法をば誰か信すべき哉先國家を祈りて須らく佛法を立つべし」とありますなどは良き證據であります、「御宮仕を法華經と思召せ一切世間の治生

められ、一向純圓の意義を十分に發揮せられたので、若し萬一我國の如き御國體の御國に御生れにならなかつたならば、大上人と雖も恐らくは如此明瞭に干佛冥合の妙趣を御發揮になることが出來ずに御仕舞になつたかも知れぬので此點こそは實に只上人が此日本國に御生れに成たを非常に嬉しく思召して入らせられた譯であるうと思はれます、然るに世間には動もすれば、日蓮上人の御人格を崇拜するの餘り超國家なりとか或は小日本の如きは日蓮上人の眼中には無かつたのである、もしも妙法を充分に弘通すること能はずば寧ろ亡國を望まれたのであると云ふ如き、不謹慎なる言葉を以て日蓮上人を偉大ならしめんとするが如きは、一には上人を小さくし、二には我御國體を小さくし、法華經自身の意義をも小さくするので、人類の爲めとさへ申せば何となく日本の爲と申すよりも偉大なるが如く考ふる迷想が不知不諳此の如き大なる謬をなすので、必竟御國體を知らざるの致す所であると申さなければなりません、濶浮提第一の戒壇として我日本國を看、

一向純國の機なりとまで仰せられたる同一の思想より日本の滅亡を一笑に附せらるゝが如きことあるべき筈はないと思ひます、萬一日本にして亡滅せば佛法も亦滅亡すべしとの意義を明言せられつゝ、他の一方には日本の亡滅を豫言せられ、寧ろ誘法の國たる日本の滅亡は一時の悲嘆にして永遠の歡喜を意味すと云ふが如き思想を起さるべき理由はないので、小蒙古御書に於ても其邊の御考が明瞭に分りますのであります、國家の大事を餘所事にして豫言の適中を誇るが如きは斷然破門すると迄仰せられたのであります、

是等の關係を考て見ますれば、日蓮主義は他の革命の意義ある國家とは融合し難き意味合がある、寧ろ其等の劣等なる國體の爲には仇敵とも云ふべきであるが我日本帝國の如き崇高なる御國體に於ては日蓮主義の如き思想にあらざれば、到底渾然融合する譯には參らんのも亦勿論であります、則我日蓮主義は我大日本帝國と共に盛衰すべきもので、大日本帝國はこの主義を以て昌へ、日蓮主義は我帝國を得て始めて榮ゆべきも

れたるは御承知の通りであります、「隱岐の法皇は天子也、權太夫殿は民ぞかし、子の親を怨まんをば天照大神うけ給ひなんや、所従が主君を敵とせんをば正八幡は御用ひあるべしや」と仰せられたるに至ては精忠の餘りと外申難い、殊に「民の身として天子の徳を奪へ取るは下通上、背上下等之なり、設ひ如何に世間を治めんと思ふ志ありとも國も亂れ人も亡す可し」と云ふに至ては、更に深刻であります、昔より今に至る迄王法に敵を爲し奉る者何者か安穩なるべきや、狗犬が獅子を吠へて其腹破れざることなしと罵り、逆臣が旗をば官兵は指すことなしと賤め、「御みやづかいを法華經と思召せ」と教へ賜ふに至ては、權威を惧れずして忠節を勤め、己れの身には如何なる災難の來るをも顧みざる底の精忠は、何人も及ぶべからざる所であらうかと考へます、殊に上人の皇室を尊ばせ賜ふの證據として、妙法の弘通を初めらるゝに際しては、恭しく之を伊勢の大廟に奉告せられ、御孫弟子に當らるゝ日像上人に帝都の弘通を付囑せられたる一事に照して

のであると云ふことが明瞭に相解ることゝ信じます我等軍人が日蓮主義を崇拝すると同時に日蓮上人を讃仰致しまする根本義は、日蓮主義は我帝國の精神を讃仰致し、此主義にあらざれば我帝國の偉大なるを悟り、又之を擁護し奉るべき道なしと信するのであります、簡人的軍人としても日蓮上人を讃仰し其徳風を慕ひ、及びすながら上人の御人格を模範として進むのが何よりも大切であると云ふことを考ふるのであります、

我々が日蓮上人の御人格に就て、殊更に御慕しく感じまするのは精忠の二字にありするので、古來忠義の士としては先第一に和氣公を推すのであります、日蓮上人は決して和氣公に劣らぬ忠義の御方にあらせられたのであります、北條氏の爲には此上もなく尊敬すべく其名を聞ては鳴く鳥もひそみかへるべき北條義時に對し、其惡逆を惡むの餘り何の恐るゝ色もなく、「日本國に代始まりてより已に謀叛の者二十六人……第二十五人は頼朝、第二十六人は義時也」と迄仰せら

も明瞭であります、此他軍人として大上人を景慕し奉るべきは、克剛にして克柔なる點にありするので、凛然たる勇氣と露々たる和氣とが極端に發揮されて、而かもよく融合するが如きは誠に以て言ふに言はれぬ趣があります、古來我國軍人の精神を遺憾なく表はして居りますのは石の上の乙鷹の歌に「ものゝぶの臣の男子は大君のまけのまに、聞くとうものぞ」と申されてあります、稱徳天皇は宇佐八幡の嚴烈なる神勅を被り、痛痕なる大詔を發せられました際に「是東人は常に云く頼に箭は立つとも背に箭は立たじと云て君を一心もて護る物ぞ」とあります、之を上人が「如何に強敵重なるとも努々退く心なく恐るゝ心なかれ、縦ひ頸をば鋸もて引切りとうをばひしほこを以てつつき足にははだしを打つてさりを以つてもひと、命のかよはんさは南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と唱へて唱へ死に死するならば」と仰せられたるに比すれば少しも優る色を見出さぬのであります、如此峻烈なる事を仰せらるゝ他、一方には、事もなげに「只女房と酒

うち飲て南無妙法蓮華經と唱へ給へ、苦をば苦と悟り樂をば樂とひらき、苦樂共に思合せて南無妙法蓮華經とうち唱へさせたまへ」と仰せられ、日朗上人の牢居の様子を思ひやられては、「今夜のさむさに付ても、ろのうちのありさま、思ひやられていたはしくこそ候へあはれ殿は法華經一部を色心二法共にあそばしたる御身なれば父母六親一切衆生をもたすけ給ふべき御身なり、乃至籠をばし出させ給ひ候はゞとく／＼きたり給へ、見たてまつり見えたてまへらん」と結ばれたる御情愛の如きは、何と申べき言葉もありませぬ、元來悟り顔に他の人に對する人々は、如何にも清爽骨に徹する如き事をいふのである、心頭を滅却すれば火もまた涼し」とか、或はまた敵前にありて心の中は顛き畏れながらも、如何にも壯快の様子を見せかけて、而かも大切の場合に色を失ふて逃げるなども多のでありませぬ、一例を申程にはありませぬが、日清戦役の九月十七日の戦、これは此次の月曜に當ります、彼の日の戦は丁度一時頃から始まりましたので、敵を見ながら晝

る身には寒さも寒くは覺えも不申とは仰せられず、寒きは寒し暑きは暑しと仰せながらも、寒さを寒しと悟り暖を暖と聞く底の御心持で居らるゝので、この邊は誠に暮しく感じますのであります、而かも其主張を違らるゝ場合に於ては、他の一面に於ては「日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ旃陀羅ケ家より出たり」と仰せながらも、或は「日蓮は日本第一の法華經の行者也」と仰せられ、或は「我れ日本の眼目とならん我れ日本の大船とならん」と日蓮なくば誰か法華經の行者として佛語をたすけん」と日蓮は日本第一の富めるものなり、「日蓮其身にあひあたりて大兵を起して二十餘年日蓮一度も退く心なし」とまで仰せられて居らるゝので其極處に於ては、日蓮上人は炎をも避けず打たれに打たれて後立派なる劍となるが如き至剛至堅なる勇氣を有しながらも、朝顔の花は日の登ると共に凋み落ると知りながらも、之を摘み去るに忍びざるが如き鹽梅の床しさを備へて居らるゝので、誠に以て暮すべきの限りであります、而かも其大義名分の觀念の高くあら

食に就たのでありましたが、如何なる故かどうも食事が安らかに参りませんでした、後日になりまして人々の話に、直に戦が始まるので、御腹が空いては困るからと思ふて、充分にたべたと申人が多かつたので自分ながら自分の鄙怯を取入つたのであります、あの戦には自分も別に人に劣つた働きをした積りではありませぬので、この點から考へますとどうも他の人の云ふ事が受取れませぬから、其後何人が見ても立派な事を致しました私の親友に尋ねて見ましたら、皆私と同様の心得であつたと云ふことを知りまして始めて安心致した事があります、生來大勇の人は別として、一般の人はどうも本統の事を云はぬものと見へますがこの點は私が最も日蓮上人を慕しく考へますする點であります、苦をば苦と悟り樂を樂と聞くと云ふのは則ち此點に相違ないのであります、「身延山は好知食、冬は風烈しく、降り積む雪は不消極寒の所にて冬間晝夜の行法も尙薄しては堪へ難く」など仰せらるる御様子は實際そのまゝで、決して南無妙法蓮華經を色讀す

せらるゝことは「孝子慈父の王敵となれば父を捨て、王に参るは孝の至りなり」と仰せられたるにても明瞭にありませぬが、顧みて其御両親に對せらるゝ御孝心の深かつたことは、上人の御傳記に明白に傳へられて居りますのであります、是等の點を考へて見ますれば、國家に對する觀念と謂ひ、忠君の御思想と謂ひ、勇氣と謂ひ、慈悲心と謂ひ、御一生の御様子の極めて御質素であらせられた事と謂ひ、禮義正しくあらせられたる事と謂ひ、御傳記の上にも御消息の上にも明瞭であるので、我々軍人の目に映じたる日蓮上人は、實に軍人の典型であらせらるゝのであります、死に臨んで恐れず利の爲に心を動さず、世に先つて憂へ世に後れて樂み、終身安樂を願はずしてたい一心に君の爲國の爲神佛の爲に盡さるゝ御様子は、實に國士の典型であらせらるゝのであります、乍恐私は眞實に大上人を御慕ひ申上げ、如何にもして大上人の御教に背かずして御奉公申上たいと存するのであります。

佐渡の靈蹟

(九月十六日九段會社に開會で
る天晴會第三十例會の講演也)

帝大史料編纂委員 鷺 尾 順 敬 君

私は此夏期を利用して日蓮上人の佐渡の靈蹟を参拜して参りました、それですから本日はこの事の話をして見たいと思ふ、

私は上人の研究と云ふほどの事をした者ではありませんが、早くより上人の研究に興味を持ちまして二十五年頃より調べて見ようと思ひましたので、曾て佛教史林などに連載致しましたが、日蓮上人の遺蹟と云ふ遺蹟を巡拜したいと思ふて、十餘年以前より、總房武相甲斐地方の靈蹟を廻りましたので、さらに佐渡の靈地へ行つて見たいと思つて居りましたが、機會を得ませんので徒らに夢想を勞して居りましたのですが、この夏、新潟の方より廻りて上人の靈蹟を巡拜して参りました、

御存じの通り、佐渡は上人の事蹟の上に實に大切な

り開け始まつた様に思はる、現今は新潟より夷港に定期航路がありますが、日蓮上人は南方即ち眞野海より上陸せられたのであります、それで遺蹟は多く中原より經塚山方面に在ります、佐渡に守護を置かれししたのは平安朝時代より政治上の事が見へて居るので、村上天皇の末裔にして本間能久と云ふ人が一番古い様に思ふ、本間氏が佐渡一國を領して居つたことは今城と云ふのが本間氏の趾であつて、亦本間氏一族の趾が多い、而して鎌倉幕府の開かるゝ時、依然本間氏に歸して居つたが全盛ではなかつた様に見へる、日蓮上人の流罪せられましたのは文永八年十月二十八日で越後の寺泊を出發せられて佐渡の松ヶ崎に着かせられたと云ふことですが、此時は本間氏の勢力が全盛の時であつたが、其後、擾亂が起りて其一部を領するに至り天正年間には越後の上杉景勝に攻められて之に降り、本間氏の勢力は無くなつた、私共が歴史の上から調べて見れば、當時の人口は甚だ少なかつた様に思ふ、慶長六年家康が所領して相川の銀山の役人が定まつてか

る土地でありまして、上人の佐渡に於ける四十年の星霜は大切な事業が出来上りましたので、専門家が佐渡前佐渡後と區別する位であつて重大なる關係がある様に見える、法華宗の根本基礎は佐渡に於て成立したのではないかと思はれる位である、先づ私共が上人の事蹟を調べますには佐渡へ行くの必要を生ずるのでありまして、而して現今上人の遺蹟は如何様に保存せられて居るか、亦如何様に信じられて居るかと云ふことも知らねばならぬ、私共は歴史上の關係に就いて調べまして其後の状況を詳かにしたいと思ふのであるが然れども遺蹟と云ふ事に就きましては、其寺に大切なありまして居るのが史眼を以て見れば大切でないものがありまして居る、また反對に大切でないものの中に私共が拜見すれば殊の外大切な者がある様な次第で詳細に緻密の調査を要する譯でありませぬ、

私は佐渡の靈蹟を述べますに先つて地理の一斑を申上げます、佐渡は二個の山脈がありまして中央は豊饒なる平地である、上人時代の佐渡は經塚山方面より、

佐渡の形勢は一變して江戸との交通が開かるゝに至つた、慶長以降に於ては材料多くして能く之を知ることが出来るけれども、其以前は考證の資料が乏しいから詳しく解らない、上人流罪の當時には唯其地方に河原城などがありまして、今は新穂村と云ふ八里四方もある村となつて居るが、本間が一族にして重連と云ふものがこの土地に居られた、此地は佐渡の豊饒の中心である、上人が流罪の人となつて松ヶ崎に着かれまして、而して本間氏が上人を監護せらるゝ事になつた様に見える、遺文にある塚原と云ふ所は、當時共同墓地の様な處であつた様に考へられる、今は大野村の内に塚原がある、上人は十一月一日より塚原に棲居せられたのであるが、勿論人家などはあつたこと、は思はれぬ、上人は文永九年二月塚原に於て、開目抄を述作せられた様に拜して居りますが、此處に根本寺と云ふ大寺がある、私は古杉茂れるの間に古石塔が横ざまになつて居る其實景を見て、上人が山城の蓮臺野の如しと云はれた言など思ひ出し、何となく凄愴の感に打た

れまして墓間を徘徊しつゝ一種の感を起したのである。私共は研究者の地位に在りますので信仰の人ではなかつたが一種の感化に打たれました、それは如何に學問の力を以て考へましても制しきれぬと思ふ、この寺は上人時代の寺ではない、鐘銘に元和年間とあるので徳川の初世に建立したものと思れる、山門の前に戒壇塚と云ふのがある、慶長元和間に作られたものである、之が上人の居られた塚原三味堂の跡であると云ふのである、其土の盛つた様な小高い跡に上りて見ると茫としたる平原であつて、何となく當年追想の感に打たれるを得ない、上人は開目抄の述作が終つて、文永九年四月に一ノ谷に移られましたので、塚原には八年十一月一日より九年四月の初めまで居られた様に思はる一ノ谷には靈蹟がある、それは屢近傍の山嶺に登られて日輪を拜せられたと云ふ、即ち袈裟懸松と云ふのがある、現今實相寺の所在地でこの寺は上人在世時代よりの寺であると云ふては居るが、私共は少し議論はある、それは兎に角其處に居られて山に登られたと云ふ

打たれたのでありますが、妙宣寺の寶物は天下の珍品で誠に得難き重寶であります。

さきに申上げました阿佛坊夫妻の事でありますが、阿佛坊夫妻が居られたのは新穂と云ふ所で、後に八瀬ヶ墓と云ふ地に移つたとの事である、故に妙宣寺は阿佛坊の地理上の遺蹟ではない、寺へ参りまする寺に、此形地は寺でなかつたと云ふ感化がしましたから、周圍を廻りて見ましたが之は城跡であると思ひながら、寺に就いて調べると、本間高重の城跡であつたと云ふ事で、高重は天正七年以上杉景勝に攻め亡されたが、妙宣寺は天正年間本間高重が亡びる前か亡びたる後か、今の寺となつたものとおもはる、阿佛坊村は一族五軒あるが、是等が保護の方法を爲たのではあるまいか、遠藤氏の系圖があつたが之は史學上貴重資料であります。

上人は文永十一年二月赦免の仰せを得て柏崎に送られ、それより再び鎌倉の地に遷られたのである。

私共は學問上の研究より觀たのですが、多くの資料

道がありまする、こゝに上人を預つて居つた近藤清久の未裔である清吾と云ふ人が山門前に居られる、亦一ノ谷は文永十年四月に觀心本尊抄が著されたので、宗門にとりては大事業の靈蹟なりとの感想は湧いて、徘徊數次去ることを得なかつたのであります、上人始め塚原に居られました時阿佛坊夫妻が信仰を以て供養したと云ふ事がある、遠藤爲盛(文覺)第一の檀越にして後上人の教化を受けて阿佛坊日得と云ふに至つたのである。

上人の遺蹟遺物に就ては信仰上より見れば總てを信するも差支ないが、史上より見れば上人の根柢に向て調べなければならぬ、上人の遺物を根柢とし立脚となして研究せねば史的資料を得ることが出来ぬ、若し佐渡に於て鎌倉時代の遺物が少しもないと云ふことに結着するならば、上人の佐渡の事蹟を失ふものあるを憂へたのであるが、妙宣寺に於て研究の立脚を見出ししましたので、六百年前の上人が生きて居らるゝの心地して拜見しました、私は其實際の遺物に接して深く感を得ましたのみならず、さらに六百年前の上人の生活境遇を追想して無限の感を起しました、靈蹟は歴史上の研究に止まらずして、實際に之に觸るれば一種犯すべからざる印象を與ふるものであります。

日本の歴史の中で國史を飾りて居る偉人は多數であります、是は武人と僧侶である、史上に貼りまするのは武人の城跡と僧侶の伽藍である、武人にして史を飾りて居る豊太閤桶公の如きは能く紹介せられて居るが、半面の僧侶は紹介せられて居らぬ、是は徳川時代の偏見であり、又日蓮宗の者が漫りに白粉を塗りて單に佛教界の人として見たからである、我國歴史上の偉人豪傑は武人と僧侶であるが、僧侶は學者の偏見の爲に埋められて居る、徳川時代に於て神儒佛三道併立して居つた時、神儒の提携によりて佛教僧侶を敵視して居つたのであるが、是は當年の思想の方向が誤りて居つたものと謂はざるを得ない。

我日本國民が祖先の偉人豪傑なる宗教家の信仰や、亦其修養を味ふ事の出来ないならばそれほど不幸はあ

るさいとおもはる、我々は、大に之を味いたいと思ふ、日蓮上人の如き出色の偉人は歴史より厳正なる研究を遂ぐるにも、亦宗教界の大偉人として信仰に修養に味ふて見たいと思ふ、殊に國民教育の上から重大なる事ではあるまいかと考へます、

(文責を承る三上生)

開目抄に云く(縮遺文)

日蓮といひし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ。此は魂魄佐土の國にいたりて返年の二月雪中にしるして有縁の弟子へをくれれば。をそろしくてをそろしからずみん人いかにをぢぬらむ。此は釋迦多寶十方の諸佛の未來日本國當世をうつし給ふ明鏡なりかたみともみるべし。

佛教統一と日蓮上人

頭本法華宗大學林長 今成 乾 隨 君

佛教統一と云ふ事は、苟くも佛教徒を以て任ずる者は何人と雖も之を希望しない譯はない筈である、元來佛教は唯一であるべきが當然であるのは、各宗各派各其好む所によつて相對立して居ると云ふ事は甚だ心得違ひと云はねばならぬ、佛教は釋迦牟尼佛の一心から現はれたものであるから、其根本義は唯一でなければならぬ筈である、若し釋迦牟尼佛の悟が唯一でなくして、二つも三つも乃至三十幾通りと云ふ状態であつたならば、それは釋尊は悟りし人でなくして寧ろ迷のひと云はねばならぬ、即ち精神の根本が唯一でなければそれは矛盾した思想を有する人と云はねばならぬ、已に佛陀と自ら稱し人も之を信仰するにありとすれば、其根本の悟が幾多にも別れて居ると云ふ事はない筈である、果して然うであるならば、釋尊の悟即ち宗旨が唯一であると云ふ事は當然な筈である。

然るに釋尊の滅後、幾多の宗派が勃興し相對立し相排擠すると云ふは、釋迦牟尼の悟の根本に體達せざるの罪と云はなければならぬ、然るに此唯一の佛陀の悟に對して幾多の宗派が分裂して居ると云ふものは、其宗旨の開祖と云はるべき人が、佛の教と全然無關係で、單に自己の見識を以て其宗旨を開いたのかと云ふに決してさうでない、皆悉く佛陀の經典を基礎として立つたのである、然らば進んで如來の悟に幾様の區別があるかと云ふに、先に述べる通り唯一である、唯一の悟が、何故に種々様々に現はれて居るかと云ふに、之は如來に權實二智があるからである、權とは方便であつて、實とは眞實である、如來の唯一の悟は一實の妙法であるけれども、此妙法を宣傳せんが爲に權智を應用せられたものである、權智は實智を顯揚する爲の方便であつて、實智が現はれれば權智は已に其任務を果したものであるからして、之に信賴すべき必要はない筈である、此權實二智を他の語を以て云へば權は隨他意語にして實は隨自意語である、如來は直ち

に實教を述べんとするも、衆生が之を聽するの時期に至らざるを以て、止むなく權智を應用せられたものである、已知より未知に進むが如く、如來と衆生と相許す程度に於て先づ之を導き、進んで自己の本懐即ち實智に入らしめんとするに外ならない譯である、例へば親が子の心に隨ふのは權智即ち隨他意的であつて、親が子を隨へるのが實智即ち隨自意的である、此權實二智の關係を了解し、權教方便を捨て、實教眞實の教につけば、即ち如來の悟の一心に達する譯である、されば一切の佛教は學問として尊重する事は元より其宜しき所であるけれども、之を宗旨として相對立すると云ふ事は絶対に誤解である。

然るに各宗の祖師は此權教方便に著着を爲し、之を以て直ちに如來の本懐なりと誤解せるより、幾多の宗派が分裂するに到つた次第である、吾宗祖日蓮上人は何故に先に學びし眞言宗を捨て、法華眞實の妙法を廣むるに至つたかと云ふに、前に述べたやうに佛教は唯一である、幾多の宗派及び教義が存在すると雖も、如

來の悟は唯一なるべしと確信し、遂に如來の本懷を會得し、各宗の存立を否認して其教義を佛教學上の參考書とするに止め、以て佛教の統一的大事業に従事せられたのである、彼の有名な四個の格言を唱導せられたのも、其經典を破釋せられたのではなく、之を以て佛陀の本懷なりとし宗旨として人類救済の教とするの不可なるを論破せられたのである、如何なる宗旨の經典等も之を正實に研究し、而して其根本を探れば遂に法華一實の妙に歸せざるを得ざる譯である。

然らば謂ふ所の法華一實の妙とは如何なるものであるかと云ふに、吾人の本體に無限なる價值ある事を知らしめたものである、而して之を事實の上に證明したるものは印度降誕の釋尊の顯本である、此人世に出現せられたる釋尊は、一面からして之を見れば肉體を有する吾人と敢て等差なきも、其悟即ち其内含的方面を拜すれば久遠實成の本佛である、即ち生死無常を離れ自在無碍の大力用を有し、一切苦惱を解脱して、清淨無垢の徳を有し、其智慧は宇宙の眞理の本源を證し、其

の一月の如く、諸佛諸菩薩等は田毎に映る月影の如くである、されば佛教を學び、之を信せんとする者はあらゆる信仰の難多なる對象に對し、其根本は唯一本佛にある事を信するに至れば、一切の諸宗派の存在を見るの必要な事を自覺するであらう、而して此久遠の本佛と吾人とは如何なる關係があるかと云ふに、本來父子の因縁ある譯である、釋尊の顯本が久遠の本佛なるが如く、吾々の本體も亦久遠の本佛を宿して居る譯である。

吾等は自ら平凡なる一個の人類に過ぎぬと思へるも之れ畢竟迷の狀態にあるからである、深く吾人の本體を察すれば、常樂我淨の四徳即ち前に述べた、常住不滅(常)、一切苦惱の解脱(樂)、自在無碍(我)、清淨無垢(淨)の徳を供へて居るのである、故に久遠の本佛と吾人の本體とは其實體に於ては何等の差異もない譯であるが、然し事實上から之を見れば本佛と吾人とは雲泥の差がある譯である、親が子をして親の位地に到らしめんとするが如く、本佛も亦吾等をして本佛の地位

慈悲は一切を濟度する完全圓滿なる靈の現はれである

此久遠の佛陀は一切經に絶えて無くして、只法華經壽量品のみに現はれて居るのである、或は彌陀佛と云ひ、大日と云ひ、藥師と云ひ、其他あらゆる佛菩薩等は人世に出現せられたる歴史的人格にあらすして、只僅かに釋尊の説法によつて其存在を認め、或は釋尊の不思議の働によりて其所に影現せられたものである故に諸佛諸菩薩等の活殺は釋尊の權限に屬すると云ふも不可ない譯である、釋迦それ自身が久遠の本佛なりと宣言せらるゝ準備の必要として、あらゆる佛菩薩が現はれたものである、素より釋尊が悉達太子としての其肉體的生活は吾人と異なる所はない、而して成道の曉久遠の本佛なりと自覺せられたのである、否無始實在の常住の佛陀が人類救済の爲めの顯現である、而も之を説くに言葉なく、止むなく一時方便としてあらゆる佛菩薩等を説き、法華經に至つて始めて之を自分の分身なりとし、又是等の佛菩薩も悉く釋尊の分身なる事を承認したるに見ても明かである、例へば本佛は天

に到らしめんとするのである、此本佛と吾人との關係は不可離的であつて、今日宗教學上に云ふ具存一體教と云ふに屬する事と思ふ、具は即ち吾人本來の佛陀にして、存は顯本せられたる久遠の本佛である、此佛陀と吾人との關係が互具圓融して吾等は本佛の慈悲界に攝取せられ、本佛は吾等の精神に止宿せらるゝのである、此有様は即ち妙法である。

之を要するに佛陀出世の本懷は吾等衆生をして佛智目を開かしめんとするにありて、之を達するには此本佛を信じ、此本佛に救濟せらるゝに外ならないのである、而して此本佛は今現に常住に在ますと雖も、吾心轉倒して居るが故に之を見上る事を得ないのである、顯本せられたる佛陀は、化導の必要上方便して涅槃を現せられ、其悟の本源たる妙法蓮華經を止め、此妙法を唯一の高弟たる上行菩薩に附與せられ、如來滅後二千年以後即ち末法に於て、妙法蓮華經を宣傳し、一切の衆生をして如來の智見と同じからしめんとしたまふたのである、此上行菩薩は神力品に「日月の光明の能

く諸の幽冥を除くが如く、斯人世間に行じて能く衆生の暗を滅し、無量の菩薩をして畢竟して一乘に任せしめん」とあるが如く、佛の勅命を蒙りて大日本帝國に日蓮と現はれ、一切佛敎の混亂せる解釋を統一し、以て一乘の妙法を信奉せしめられたるに外ならないのである。

前來述ぶるが如く佛敎は根本的に統一せらるべき運命を有ち、又之を統一するが佛敎徒の任務なる事は何人も争ふべからざる事と思ふ、而して此佛敎統一が如何なる影響あるかと云ふに、一切の人心をして靈的方面に於て調和統一を圖り、億兆一心の理想を實現し、國家的活動の場合に於ても如何に偉大なる力を現はすであらうかと云ふ事は、吾人想像の外であると思ふ。日蓮上人が立正安國論を建白せられたる意味も、一面如來の使として思想界の統一を計り、一面國民として共同一致の活動を顯現せられたるものであると思ふ。近時一部の宗教家の間に佛敎統一の聲が起りかけて居るのは、漸く自覺に達せんとしつゝあるのである。

願はくは佛敎を學ぶ者は勿論、國家經營の任に當る者も、此間の消息を解し、心靈界の統一と國民的統一と相調和し、以て國運隆盛の資料とすることが、現下思想界の危機に際し最も緊要なる問題であると信する。

大聖日蓮云く阿佛坊抄 一四五三

此等の經々は見すきかず候へども、但法華經の一字一句よみ候へば、彼彼の經々を一字もをとさずよむにて候なるぞ。

修 養

兒童教育と模倣の心理

『九教育學術界』——速水文學士は模倣の心理と教育と題して極めて緻密に兒童心理の狀態を論じ模倣と教育との關係が如何に密接にして重要なるものなるかに就て其説く所劃切有益なる點多し云く『併し模倣の働きは單に斯の如き一時的の影響を與ふるのみでない我々の判斷趣味又は智識是等は總て模倣に依りて形造られてある我々は兒童の時模倣に依つて言語の能力を得ると共に社會に存する總ての概念的の財産を繼承する事が出来るのであるまたそればかりでない我々の自我の觀念もロイスやホルダーグインの如き學者が極力主張して居る様に模倣の働きが本になつて獲得されるのである我は先づ自我の觀念が出来て然る後に之を外界に投射して他人の觀念を作るのではなくして他人が初めに假定せられて其他人の自己に對する態度注意に依つて自我の觀念を得るに至るのである他人の自己に對する興味が自己自身に對する興味を誘致して來るのである女子が自ら女であると云ふ自覺を起すのも竟畢他人なり兩親なり

友人なりが自分を女子として取扱ふて女の着物を着せたり若くは女らしくせよと云ふやうなことを言つて男子とは全く別な取扱をするから極まつて來るのである斯の如く考へて來ると教育上兒童が眞理又は善に對して興味を感じて來るやうになり又眞理を愛し善を行ふやうになつて來ることは他の人が是等の眞理なり善に對して興味をもつからであつて兒童が其父母を尊び師長を尊敬するに至るのは他人が父母を尊めたり師長を敬して居るからである」と論じて居られるが記者の如きはつねに模倣の經驗が人自身の性格を作るものであることを主張するのである速水氏の所説の如く他の人の興味を直ちに自己の興味として感ずることが眞理ならばこのころ國民道徳のために躍いで居る祖先崇拜の問題の如きもあまりに面倒なことはあるまいと思ふそれは先づ家庭の長者が祖先靈牌の祭壇を清潔にして朝夕威儀を正して崇拜の誠意を捧ぐるものがあるならば兒童も青年も凡て其風に感じ所謂そこに模倣心理の作用を促して自然的に祖先の崇むべき理義をも自覺し實際に行ふことになるであらうと思はれる然れども今の我國の多數を有する佛敎徒の家庭に於ては模倣によりて祖先崇拜の觀念を養ひ之を實行せしむることは大

反省をせなければ全く望みがない何せかと云へば多くの家庭の佛壇は汚ないそうして朝夕老人が香や燈明をあげるので家長などは一向構はないと云ふのが現在の状態であるからである、そうであるから如何に一方から強いて之を爲せよと云ふたからとて家庭の方面からこの思想の大事なることを覺らしめなかつたならば所謂模倣心理の作用として効果のあるべき筈がない家庭における長者の一舉一動は二六時中模倣して居るのであるから兒童の如きは長者の心持によりて何うにでもなるのであるそれ故に長者は子供が可愛い立派にしたと思ふならば自己の精神並に行爲を正しくして模倣せらるゝ様にせねばならぬと思ふ。

實生活

と宗教

『秋太陽』——金子筑水氏が現實教と題して論じて居る一節に云く『宗教や哲學が人生に必然な現象であるならば其等は是非其實人生の中心に立脚して此の實人生を補益し誘導するものでなければならぬ實人生に對する現代人の思想は餘程變つて來た現代人はもはや幼稚な空想や神秘にあこがれない現實世界をかけ離れた不可思議界には何程の興味をも感じない人間の生活は要するに地上の生活である血や涙や汗にはじんだ現在生活の外に眞

の生命はない』と云つて極端極尾現實主義を叫んで居るが唯だそれ血や涙や汗のみの地上生活であるならば人間の生活はあまりに無意味と謂はざるを得ない人間が汗を流して生活を營んで居ることは事實だがその意味だけの生存と云ふものは出来ない事である現在生活の外に生命はないと云ふて居つても人は現在其まゝの満足だけでは生きて居られない必ずつねに不斷向上し發展し新しき大なる舞臺を作るべく努力して居るのであつて其の向上の前途は未來に屬し發展の進路は將來に存するのである素より現實主義が悪いと云ふのでは

はないがそこに根柢に深い意義を含ませることがなくてはならぬ現在にかけ離れてはいかぬが而し未來に關係も融合もない現在主義は個人が存在が出来ない亦宗教は現實人生中心に立脚せねばいかぬと云ふことば勿論の事である他は措いて謂はないが日蓮主義は確かに人生を尊重して直接に人間生活と交渉を有つて居る其一二を擧ぐれば法華經常不輕品にはその全體に亘りて人生を尊重して善良ならしめよと訓へ又『俗間の經書治世の語言資生の業等を説かんに皆正法に順せん』と示されてあつて人道政治法律殖産工藝等の人生百般の事は眞正なる宗教と並行してこそ初めて社會の光りとな

るべきものだ』と法華經に教へられてある、而して日蓮上人は『先づ生前を安んじて更らに歿後を扶けん』と論じ又『宮仕を法華經と思召せ』と述べて信者の武士に教訓を與へて居るが之を味識するならばいかに日蓮主義が現實人生を補益し向上せしむる教へであるか解る吾々はあまり極端なる現實主義は一種の危険思想の影であるとして豫め警戒せざるを得ない。

人口増加

と犯罪

『九月普通教育』——法學博士花井卓藏氏は逐年犯罪事件の増加するは人口の増殖につれて職業の缺乏を來たし社會政策上の目的は犯罪を防遏し罪惡を絶滅するに在つて存する而して人口の増加は犯罪の増加を來すのである我々は如何にして之を救ふべきかを考究せねばなりませぬ明治四十一年末に於ける人口は總計五千四百四十五萬八千人にして之を三十六年末に於ける四千八百五十四萬二千人に比すれば實に一九九十一萬六千人の増加にして今之を我國の總面積十四萬七千方哩に除すれば一方哩平均三百四十二人に當るのである生活難の襲ひ來ること、貧民階級の殖えて來るのは寧ろ怪むに足らぬ我輩は差當りこの考案なしと雖先づ第一に法律を以て失業

者の保護に關する道を立てねばならぬと思ふ失業者保護の道に就ては各國概ね法令上の規定あるに拘はらず我國に於て之が法制の備らざるは甚だ面目と考へる第一には前科者に職業を授けるの方法を講せねばならぬ又第二には各種の社會により防貧並救貧並作業教育の門を開かねばならぬ犯罪を發生する幾多の原因中職業の缺乏は最も有力なる原因の一なることは何人も認むる所である而して人口の増加は勞務の範圍を狭くする住むに家なきの人求めて職を得ざる人失望落膽の極は腕力の缺乏となり終に罪に救を求むるに至るのである故に犯罪事件の増加を防止するには當局者之が救済の設備をなさねばいけぬ』と極論せられて居るが恒産を授けることは急務である法制の下に之が救済策を講ずるは國家當然の責務であるがさらに地方自治體にありても公設なり又は私設に於てこの勞働保護の機關を設けることが必要であることに斯かる事業は宗教徒と有志者が提携して熱心之に當るならば効果の多大なるものがあるに相違ない現今いかに犯罪者が殖えて免因保護事業の設備を完全にせねばならぬと云つては居るが保護の實績は少しも擧らない累犯者が殖えて居る夫

れ故に本問題の如きは防貧主義の下に一定の職業を與へて一面娯樂と訓育とを充分にふさごまねばいかに完備せる法制を設けても犯罪の減少を計ることは至難ではあるまいか。

教育の方針と學生の志操

『丸新日本』——大隈伯は維新の國是より見たる教育の方針と題して十數頁に亘る論議を公表して居らるゝが其結論に云く「現代の社會は何れの方面を見るも皆情氣満々としてゐる如斯にして底止するなくんば我日本帝國が世界の文明的競争場裡に立つて優越なる地位を占むること決して容易でない維新以來既に四十年憲政實施以降既に二十有餘年而して國家の將來を荷ふて立つべき青年學生の志操を見よ何を羞微不振を極むるの甚しき亦彼等の抱負を見よ何を權勢に憧れて自己の功利を先きにするに急なる然り彼等を如斯き状態に導きたるもの蓋し幾多の原因あるべしと疑固陋なる官學者流の思想が與つて力あるものと謂はざるを得ない」と云ふ論法で盛んに官學界の惡弊を痛撃し將來の國民として適應すべき教育の下に學生の思想を刷新し其抱負を闊大ならしめなければならぬと大廣長舌を振つて居る伯の見たる學生は所謂官學者流の惡思想のために影響せられ

たのであると云ふが記者の如きも確かにそれは認めないのであるが他に大なる主因の存することを觀なければならぬそれは廣い廣い社會が小さい人物を作りてこそ、仕事をさせる様な設備になつて居る今の時代では私學派の旗頭たる伯の學校へ行つて訓練を受けたからとて伯の如き大人物にはなれ様善がない何せかと云へば訓練する人が頗る小さいので伯の如き大きい人でないからである又我國には千様萬種の思想が輸入されて居つてこのごろは個人主義だの本能主義だの入り亂れて自由に帝國性の生氣を掻きむしられつゝあるので多くは浮いた調子で其日だけを送ればと云ふ果敢ない精神状態になつて居りはせぬが我々の考ふる所では外界の惡思想を防遏するに足るだけの根柢ある教育方針を定めなければ學生の志操を高めて抱負を闊大ならしむると云ふ様なことは出来ないとおもふ即ち根柢の事業は永久に連續的關係を有するものであつて自己は中ばに瘡るゝ事があつても將來には完成するものであることを諒得せしむる事であるこの思想が養はれるなら敢て一時の利達にあせりて權勢に趨ることもあるまい味を屈し節を枉ぐることも少なくなるであらう。

婦人と宗教

『肝女學世界』——實業界の名士早川千吉郎氏云く「要するに迷ふとか弱いとかいふ事は皆な自己の全精神を支配する鞏固な道德堅實な思想とかいふものを絶えず己が念頭に置いてそれに絶大なる權威を認めないからである己れの信する宗教思想主義若くは主張に絶大なる權威を認めて其に従て行動する以上は其處に迷ひとか疑ひとかいふやうなものとは絶對にないのである信する宗教もなく主義もなき人は無靈無心の形骸に過ぎない幽靈に過ぎない幽靈は昔は青暗い森や腥い墓などにももの凄いやうにして現はれたが現代の幽靈は往來電車の中劇場などにも美しい姿をして現はれる己れの信する宗教に依つて教はれず常に迷ひ疑ふ様な人は宗教をば祈禱や何かのやうに單に日常の儀式と思ひなしてそれ以上宗教に絶大の權威を認めない人また認むる事の出来ない人なのである私は現代の婦人を宗教に依つて教ひ宗教に依つて導きたいと思つて居る」と謂はれて居るが記者の如きも大に感を得るものである其女性が女性たるの天分を自覺することは何うしても宗教の教訓に依らねばならぬ我輩は成金黨が斯の如き意見を持つ事になつたのを奇とし之を紹介して置く。(三上生)



大聖日蓮云く

日蓮は日本第一の法華經の行者なり日蓮が弟子檀那等の中に日蓮より後に來り給ひ候はば、梵天帝釋四大天王閻魔法皇の御前にても、日本第一の法華經の行者日蓮房が弟子檀那なりと名乗りて通り給ふべし、乃至、但し各々の信心に依るべく候。

教報

△東京天晴會

◎聖語に「夫れ經文の如くならば隨方演說も有べき歟」と宣べられてあるが我天晴會々員はつれに熱烈なる意氣を以て日蓮主義の宣傳に努力せざるものはない亦大聖の靈威の導き賜ふものか例會ごとに有力なる新入會者ありて益々本會の勢威光彩を加ふ九月十六日第三十例會を九段阪上管行社樓上に開かれた同日は幹事より特に「會員林太一郎君は陸軍中將に昇任し第七師團長に 御親補の光榮を擲いて來る二十日出發赴任に付例會席上同君を正賓として祝盃を擧ぐ午後六時五十分食堂を開く當て來會せよ」との案内を發したため定刻までには六十餘の椅子は不足を告ぐるほどであつた松本幹事副會を宣するや本多日生君は「各國の宗教と日蓮主義」と題して宮體那の梵音を唱らし其宗教としては信仰の客體が總ての上に完備せるものでなければならぬ理義より説き起して高等と劣等との二種類に分類し高等批判の上に於ては單一宗教も多神教も唯一宗教も最後絶対の本尊として崇敬を拂ふに足らぬ唯だ統一宗教の理義を有するものが宗教としての最後の判定權の在るを論じ我日蓮主義の特長たる開顯の妙旨はまさしく統一宗教なりと斷言を與へて獨特の意見を發表し日蓮主義信仰者の熱火に油をそそぐの觀ありしは如何にも壯快であつた大に驚異を感ず

敬君は本誌に掲載せる如く佐渡の靈蹟についていとも熱心に述べられた講演が終つて少時休憩の後一分の差もなく六時五十分食堂は開かれ正賓たる林陸軍中將及び主人役の幹事崎博士を中央に本多藤田松森正を始めて松本海軍中將石橋少將小原少將宮岡少將加藤主計總監小笠原大佐堀内大佐松原大佐佐藤大佐其他の名士相對して卓を圍めるもの六十有八名であつたこの日の新入會員は柴田幹事と紹介し一同は拍手して歓迎の意を表した新會員は

軍艦政本部長海軍中將 松本 和君
本門宗會長大前正 小原日純君
東京府川崎砂送寺 水島抄行君

の三氏である次で松本幹事が諸般の會務を報告し終るや崎博士は林將軍に送別の辭を呈せんがために起られた「私は幹事の一人として嗚呼がましくも會を代表して送別の辭を述ぶるとは自分に取つて最も光榮とする處である普通一個人として考へて見ても閣下の榮達は非出度いことである閣下の任地は北門の雄論である國防軍備上のことは知らぬけれども北門の緊要なる地形に在ることは吾人と雖之を解し得らるゝ也亦之を公として考へますれば更らに悦ぶべき事である日蓮上人は日本國に法を弘むるのみならず一瀛浮提に擴布すべき大理想を有すること勿論然れども上人の一生は海外宣教を企つべきことが出来なかつたが日蓮上人に帝都の弘運を托し日持上人は先師の志を繼ぎ富士の下より颯然として雪の北海へ出發せられたと云ふ今我々が日持上人北海神威の壯麗を追憶するに當年の教勢は正

はらず毎會入會者ありて大に盛運を呈して居る九月二十四日午後一時より赤坂萬壽山五丁目の會員安川氏の邸に第三例會を開いた海軍大佐佐藤大郎君は願めしき軍服を召して壇上に立たれた大佐の態度はいかゞ會員の氣に入つた様であつた大佐は始めに各方面より婦人通有の缺點を擧げて反省を促がしさらに進んで「我現は男女の秩序が神代より一定して居るので而してこの時代の女性に決して消極的でなく積極的の性格を備へて居るうちにも自づから云ふに謂はれぬ味の存して居られたので日蓮上人の「女人」となる事に隨つて物を隨へる身なり」との難有御言葉の意味は實に婦徳の根本であると詳論し最後に「日蓮れば覺高し」であつて婦人はこゝろめばこゝろほど其徳は高くなるものであると論を結ばれたがげに割切連絡なる教訓であつたそれより本多大前正に大本尊の寶前にて法國冥合の新念を爲し法味を擗けたる後實在論を提供して各方面より實在の理義を説き特に十如是抄の聖文に就き諒々切々本佛實在の疑ふべからざるを論證して大慈悲の傘を知らしめたるに湯仰の信念をさゞぐべきを懇説せられ講演の終つたのは午後五時過ぎであつた當日彼岸の中日なりとて特に安川氏は秋の餅を供養し一同歡喜法悅のうちに隨意教會を告げた

しく身延富士を中心として更らに北海に教を布くべきであつたと思はれる北海は我が主義の上に壯麗の である爰に當年の日持上人の精神は移して以て今日の中將閣下の精神といふも過言でない故に我々は北門の雄論たる旭川に林中將の榮達は遠く且つ大なるものあることを期待するのである願くばこの心を以て北海に響けられんことを尚ほ閣下常人は是より御寒いながら御身を大事にと挨拶するであらうが然し閣下は閣下に於て是れ健康を増すのよすがであらう彼の塚原の野身延の山寒苦鳥の苦みの間に居つて平然たるものは實に大上人の樂天の境涯である今の閣下に於てまた之を見ることが出来やう……さるにても白髮？否童顔げにも憤かしき吾黨の布袋と暫し相別れんとす無量の感概に打たるゝものがある願くは一同杯を擧げて中將閣下の健康を祝さう一博士の發聲に於て林中將の真義を三唱せられて乾杯次に藤田正は天晴會が旭川に分發せられたりと祝意を表し且つ送別の詩を朗吟せられた「鐵馬嘶風向北門。秋高邊塞易消魂。將軍控劍爲何事。塵覆蓬安國論」聖成氏また起て薩摩聲を振ひ我々は青年なり七十二歳位になつて始めて成人したと云ふべきである大にこの主義の爲に奮闘せねばならぬとて意氣壯壯の辭を以て中將を送り終るや林中將は童顔ながら風爽たる英姿現すべからざる態度を以て答辭を述べ云く「現下閣下並に諸君今夕の爲に盛大なる送別會をお開き下されしことを謹んで謝しまする且つ又崎博士藤田正等各位より忘るべからざる教訓を賜うせることを特に感謝し奉る予は一昨年夏本

△地明會

◎聖訓に「男の仕業は女の力也」と仰せられて婦人が内に在りて能く家政を整理し兒童の育成に力を致し婦人としての務めを完ふするならば男子は外に向て充分に活動するを得て事業の成効を達すべきものなりとほげに男子にも婦人にも適切なる教訓である即ち雙方の資格を認め雙方の責務を示し共に和氣融融の裡に其分を盡すべきことが教へられて居るされば婦人として或程度までは精神修養をせねばならぬ偉大なる人格の靈威に開かれて小人格なりとも向上せしめねばならぬ本會の如きは世の通常婦人會とは異つて上の如き目的に依つて組織したものであるが發會以來日淺きにも

はらず毎會入會者ありて大に盛運を呈して居る九月二十四日午後一時より赤坂萬壽山五丁目の會員安川氏の邸に第三例會を開いた海軍大佐佐藤大郎君は願めしき軍服を召して壇上に立たれた大佐の態度はいかゞ會員の氣に入つた様であつた大佐は始めに各方面より婦人通有の缺點を擧げて反省を促がしさらに進んで「我現は男女の秩序が神代より一定して居るので而してこの時代の女性に決して消極的でなく積極的の性格を備へて居るうちにも自づから云ふに謂はれぬ味の存して居られたので日蓮上人の「女人」となる事に隨つて物を隨へる身なり」との難有御言葉の意味は實に婦徳の根本であると詳論し最後に「日蓮れば覺高し」であつて婦人はこゝろめばこゝろほど其徳は高くなるものであると論を結ばれたがげに割切連絡なる教訓であつたそれより本多大前正に大本尊の寶前にて法國冥合の新念を爲し法味を擗けたる後實在論を提供して各方面より實在の理義を説き特に十如是抄の聖文に就き諒々切々本佛實在の疑ふべからざるを論證して大慈悲の傘を知らしめたるに湯仰の信念をさゞぐべきを懇説せられ講演の終つたのは午後五時過ぎであつた當日彼岸の中日なりとて特に安川氏は秋の餅を供養し一同歡喜法悅のうちに隨意教會を告げた

行ひ國運の榮と法の弘布を祈りたる後井村日成師は三方合成と題して大法の救済方と本師の慈悲と吾等が熱烈の信仰が感應交しとそこに大覺を得べき所以を示し山根日東師は徳性の涵養に就いて祖書の要文を引き因縁譬喩をもうけて平易に簡明に講明せられたので一日日蓮主義のいと受けなる御教なることを感得して午後五時各歸途に就かれた(白碧生)

△第一義會

◎九月十七日例會講演を開いた例の如く修法の後井村日成師は信心に就いて相性體の三義に別ち無礙隨從或は一心清淨又は決定不動の意味を懸して信仰を誘致し本多大前正は智徳兼備の教と題して各宗教の教へを暫的ならば慈悲なく又慈悲博愛なれば智を缺ける片論の者なるも法華經は哲學的思索の上より、整然として完備し徳の方面に於ては萬善萬徳を具ふる最上の教なりとの理義を説き大に日蓮主義にあらずんば國家民生を向上せしむるに由なきを論じ意氣天を衝く激があつたが、る講演は數百名の會衆に聴かせたらばと感じを起した位である (白碧生)

◎九月十七日例會を淺草吉野町本部に開く東京の人は妙な氣風を持つて居るそれは會を設けても振はなければ人がよりつきもせんが毎回共幹士が熱心に講演をして居ると自然に人が集まるそうして段々に増えることを以て見るに先づ氣風と威勢のよささうなにつく

◎九月十六日午後一時より淺草南松山町法成寺に例會を開いた山根正の導師にて法要を

△妙教婦人會

◎九月十六日午後一時より淺草南松山町法成寺に例會を開いた山根正の導師にて法要を

◎九月十七日例會を淺草吉野町本部に開く東京の人は妙な氣風を持つて居るそれは會を設けても振はなければ人がよりつきもせんが毎回共幹士が熱心に講演をして居ると自然に人が集まるそうして段々に増えることを以て見るに先づ氣風と威勢のよささうなにつく

◎九月十七日例會を淺草吉野町本部に開く東京の人は妙な氣風を持つて居るそれは會を設けても振はなければ人がよりつきもせんが毎回共幹士が熱心に講演をして居ると自然に人が集まるそうして段々に増えることを以て見るに先づ氣風と威勢のよささうなにつく

△國明會

◎九月十七日例會を淺草吉野町本部に開く東京の人は妙な氣風を持つて居るそれは會を設けても振はなければ人がよりつきもせんが毎回共幹士が熱心に講演をして居ると自然に人が集まるそうして段々に増えることを以て見るに先づ氣風と威勢のよささうなにつく

◎九月十七日例會を淺草吉野町本部に開く東京の人は妙な氣風を持つて居るそれは會を設けても振はなければ人がよりつきもせんが毎回共幹士が熱心に講演をして居ると自然に人が集まるそうして段々に増えることを以て見るに先づ氣風と威勢のよささうなにつく

◎九月十七日例會を淺草吉野町本部に開く東京の人は妙な氣風を持つて居るそれは會を設けても振はなければ人がよりつきもせんが毎回共幹士が熱心に講演をして居ると自然に人が集まるそうして段々に増えることを以て見るに先づ氣風と威勢のよささうなにつく

したくない本堂を會場に充てるのであるから繼續が何うであらうかと氣付つた位だ。同を重なることに會員の數も増える普通の觀衆も參る様になつた誠に法の爲に喜しい。同日は幹事吉永義彦君の上人一代の奮闘史を紹介したる後鈴木日雄師は信心と生活との意義につき平易簡明に説示せられ各自の業務が信仰の根柢を築けば皆法華經なるの意味を鼓吹して感動を與へ午後五時散會を告げた。

△親義會

◎九月二十三日午後一時より例會講演を閉いた同會は主任鈴木正の熱心なる運動により眞面目なる聽講者多く若い婦人が殊數に手にして婦士に合掌するなどに見つけられぬほどで觀衆も入會者も月次ごとに増える盛況である。この日吉永義彦君は上人の偉大なる活動を傳へて崇敬の念を喚起し三上本誌記者は正直勤勉なる上人の歴史的事實を紹介して模範的人格なる所以を論明し小林大僧正は一時の快樂を得んとして永久の苦痛を招くの愚を諭し上人の聖訓を引證して懇篤なる教示を垂れられたので聽衆何となく自己の過去の生活が誤つて居つたのを反省するものゝ如くであつた。(白學生)

△德教青年會

◎同會は毎月二回夜間講演を開催して實業家の青年子弟を對象とし德會演説を圖るのであつて主任關田智都の精進の熱誠は既に會の基礎を固ふし競ふて之に入會するの盛況になつた。毎會講演二題にして一室は國民道徳の要

旨を述べ一室は宗教上の訓話を爲して模範的實業家の養成に努力して其成績に見るべきものあるは國のため慶ぶべき事である。(白學生)

◎吉田珍雄居士母堂の葬儀 日蓮主義者として同志間に其名高き吉田居士の母堂鈇子刀自は夙に如彼の妙行に勵み祖訓を拜して婦性の徳操を固ふし子弟の訓養に努められて有爲の人材をいだし年壽八十四歳の高齡を保ち専ら信仰成佛に餘念なかりしも家族の手厚き看護をうけながら九月十一日唱題聲裡に没焉として限りに入りぬ其葬儀は十四日午後谷中瑞輪寺に幣まる會葬者無慮千餘名にして宗教家陸海軍人實業家法曹界の名士及び日蓮主義各會の代表者なりき而して哀悼の誠意を表せる甲文の重なるもの左の如し

南無法界第一本因輪本果圓具足ノ大本尊南無末法大師師開淨一聖本化上存宗祖日蓮大聖人宗門歴代の諸先聖大慈護念影現道場 茲に今優婆夷是教院妙法見照目有大法閣格の式に臨み聊か生前の徳行を按じ稱歎の徳を成さんと欲す仰願くは諸尊證誓照臨玉へ

狀を按するに大姉名は鈇子刀自文政十二年十一月廿日越前國五國に生る父は駒野忠利名族佐々木氏の遺裔にして後高須藩に仕ふ大姉幼にして穎悟國風を吟嘯すること自在人成な天稟と稱す長するに及び温良和雅令聞風に纏綿に傳ふ年十八徳川家臣吉田三陽に歸す孝順舅姑に事へ貞淑夫を勤く琴瑟相和して春風室に滿つ五男三女あり不幸にして三子を早く失ふと雖も其他は賢母の教養を得て其名昔々當世に

聞ゆ辯護士吉田珍雄は長たり、海軍中佐正六位勲四等功四級吉田孟十は孝たり、長女は陸軍中佐從五位勲四等功五級淺澤佐一は室たり如斯に實に家門の榮と謂ふべし大姉密傳の感する所本堂の大教を奉ずること篤實玉信なり明治十八年偶々夫三陽の喪に遭ひ菩提心地愈々固く慈愍方便益々深く毎日爰起至心禮讃の妙行を勵み自ら謀するに久違傷十卷唱題三千遍を以てし爾來廿餘年未だ嘗て一日の退轉あることなく嚴密精進して祖先亡夫の冥福に資す加之出でては參詣開法の勝縁を累ね入ては兒孫の教養に歸り老て衰色も動勉身を以て率の純信の薫化風に一族に及ぶ就中長子珍雄の如きの是れ本化篤信の人格の身を以て宗門外護の淨業に與り奔走輪旋毫も懈倦なきもの亦以て大姉平生の感化を察するに足れり四隣其徳に傾き同行其信に感ず未代此の妙好人を見る誰か曇華の思なきを得んや本年三月下旬偶々微恙を感じ近親の看護を竭すと雖も療養難しき本月十一日唱題瞑目泊然として逝く年八十四歳嗚呼悲哉

聖訓に曰く法華經を餘人のよみ候は口ばかりことばばかりよめども身によまず色心二法共にあそばされたるこそ貴く候へ、

於鈇大姉の如きは色心相應の行者本化優婆夷傳中の人と謂つべきなり

重て請ふ本化別願の三寶尊哀慈證知三從の露晴れて鷲峰の朔月に味し五障の雲消えて無垢の樂園に遊ばしめ給へ南無法法蓮華經

明治四十四年九月十四日 大僧都 妙道院日都和用。

當所に内務外務の冥合を得本因妙位に入りて到於彼岸の慕懷を達すべき也。直書に一歩も歩まずして靈鷲山を見るを得ると金言仰て之を信すべき也令體位一念信決定の功力は常樂我淨の知見を開覺せん子爰珍教婦人會を代表して悼辭を陳ぶ、尙くは來り響けよ

珍教婦人會代表 井村 日成

◎ 弔詞 弔詞 弔詞

辯護士吉田珍雄君の北堂鈇子刀自の長逝を哀悼し慕しく弔意を表す

相弔義會

本會は吉田珍雄君の令母鈇子刀自の長逝を哀悼し慕しく弔意を表す

青物町親交會

◎ 弔詞 弔詞

辯護士にして特許辯護士たる吉田珍雄君慈母鈇子刀自は高須須の藩に生れ吉田家に嫁す天資温厚頗る令聞あり内自ら毅然たる操守を持ち専ら佛法に歸依し能く衆に崇敬せらるる又兼れて易道を修め其遺典を究む刀自五男三女あり就中長男珍雄君は夙に辯護士として法曹界に名聲を馳せ又多年公共事業に盡精せるは世の知る所なり、五男五子君は現に海軍中佐にして武名噴々たり一門恒に春風和樂に充つて之れ皆刀自が温良の德積善の餘慶に因らざるべし有可らず何事ぞ人生傷情の事多く一朝の風塵鶴鶴の壽を奪ひ去りて道山に歸られんとは享年實に八十有四一門長者を失ひ兒孫哀痛斷つ嗚呼痛哉謹んで弔詞を呈す慕しくは來り響けよ

悼辭

日本橋區六之部會

子爰歎んで本會々員吉田鈇子刀自の長逝を悼む、伏して惟みるに夫れ本無無窮の大悲は盡十方に遍く九界の群生悉く救ひの御手に漏るる者なからん經に慈眼視衆生是故應頂禮と示し給ふは即是れ也宗祖之を列じて妙法の曼陀羅に文字に五字七字なれども一切衆生の導師なりとの給へり、茲に於て一信清淨の信仰の

したくない本堂を會場に充てるのであるから繼續が何うであらうかと氣付つた位だ。同を重なることに會員の數も増える普通の觀衆も參る様になつた誠に法の爲に喜しい。同日は幹事吉永義彦君の上人一代の奮闘史を紹介したる後鈴木日雄師は信心と生活との意義につき平易簡明に説示せられ各自の業務が信仰の根柢を築けば皆法華經なるの意味を鼓吹して感動を與へ午後五時散會を告げた。

△親義會

◎九月二十三日午後一時より例會講演を閉いた同會は主任鈴木正の熱心なる運動により眞面目なる聽講者多く若い婦人が殊數に手にして婦士に合掌するなどに見つけられぬほどで觀衆も入會者も月次ごとに増える盛況である。この日吉永義彦君は上人の偉大なる活動を傳へて崇敬の念を喚起し三上本誌記者は正直勤勉なる上人の歴史的事實を紹介して模範的人格なる所以を論明し小林大僧正は一時の快樂を得んとして永久の苦痛を招くの愚を諭し上人の聖訓を引證して懇篤なる教示を垂れられたので聽衆何となく自己の過去の生活が誤つて居つたのを反省するものゝ如くであつた。(白學生)

△德教青年會

◎同會は毎月二回夜間講演を開催して實業家の青年子弟を對象とし德會演説を圖るのであつて主任關田智都の精進の熱誠は既に會の基礎を固ふし競ふて之に入會するの盛況になつた。毎會講演二題にして一室は國民道徳の要

旨を述べ一室は宗教上の訓話を爲して模範的實業家の養成に努力して其成績に見るべきものあるは國のため慶ぶべき事である。(白學生)

◎吉田珍雄居士母堂の葬儀 日蓮主義者として同志間に其名高き吉田居士の母堂鈇子刀自は夙に如彼の妙行に勵み祖訓を拜して婦性の徳操を固ふし子弟の訓養に努められて有爲の人材をいだし年壽八十四歳の高齡を保ち専ら信仰成佛に餘念なかりしも家族の手厚き看護をうけながら九月十一日唱題聲裡に没焉として限りに入りぬ其葬儀は十四日午後谷中瑞輪寺に幣まる會葬者無慮千餘名にして宗教家陸海軍人實業家法曹界の名士及び日蓮主義各會の代表者なりき而して哀悼の誠意を表せる甲文の重なるもの左の如し

南無法界第一本因輪本果圓具足ノ大本尊南無末法大師師開淨一聖本化上存宗祖日蓮大聖人宗門歴代の諸先聖大慈護念影現道場 茲に今優婆夷是教院妙法見照目有大法閣格の式に臨み聊か生前の徳行を按じ稱歎の徳を成さんと欲す仰願くは諸尊證誓照臨玉へ

狀を按するに大姉名は鈇子刀自文政十二年十一月廿日越前國五國に生る父は駒野忠利名族佐々木氏の遺裔にして後高須藩に仕ふ大姉幼にして穎悟國風を吟嘯すること自在人成な天稟と稱す長するに及び温良和雅令聞風に纏綿に傳ふ年十八徳川家臣吉田三陽に歸す孝順舅姑に事へ貞淑夫を勤く琴瑟相和して春風室に滿つ五男三女あり不幸にして三子を早く失ふと雖も其他は賢母の教養を得て其名昔々當世に

聞ゆ辯護士吉田珍雄は長たり、海軍中佐正六位勲四等功四級吉田孟十は孝たり、長女は陸軍中佐從五位勲四等功五級淺澤佐一は室たり如斯に實に家門の榮と謂ふべし大姉密傳の感する所本堂の大教を奉ずること篤實玉信なり明治十八年偶々夫三陽の喪に遭ひ菩提心地愈々固く慈愍方便益々深く毎日爰起至心禮讃の妙行を勵み自ら謀するに久違傷十卷唱題三千遍を以てし爾來廿餘年未だ嘗て一日の退轉あることなく嚴密精進して祖先亡夫の冥福に資す加之出でては參詣開法の勝縁を累ね入ては兒孫の教養に歸り老て衰色も動勉身を以て率の純信の薫化風に一族に及ぶ就中長子珍雄の如きの是れ本化篤信の人格の身を以て宗門外護の淨業に與り奔走輪旋毫も懈倦なきもの亦以て大姉平生の感化を察するに足れり四隣其徳に傾き同行其信に感ず未代此の妙好人を見る誰か曇華の思なきを得んや本年三月下旬偶々微恙を感じ近親の看護を竭すと雖も療養難しき本月十一日唱題瞑目泊然として逝く年八十四歳嗚呼悲哉

聖訓に曰く法華經を餘人のよみ候は口ばかりことばばかりよめども身によまず色心二法共にあそばされたるこそ貴く候へ、

於鈇大姉の如きは色心相應の行者本化優婆夷傳中の人と謂つべきなり

重て請ふ本化別願の三寶尊哀慈證知三從の露晴れて鷲峰の朔月に味し五障の雲消えて無垢の樂園に遊ばしめ給へ南無法法蓮華經

明治四十四年九月十四日 大僧都 妙道院日都和用。

當所に内務外務の冥合を得本因妙位に入りて到於彼岸の慕懷を達すべき也。直書に一歩も歩まずして靈鷲山を見るを得ると金言仰て之を信すべき也令體位一念信決定の功力は常樂我淨の知見を開覺せん子爰珍教婦人會を代表して悼辭を陳ぶ、尙くは來り響けよ

珍教婦人會代表 井村 日成

◎ 弔詞 弔詞 弔詞

辯護士吉田珍雄君の北堂鈇子刀自の長逝を哀悼し慕しく弔意を表す

相弔義會

本會は吉田珍雄君の令母鈇子刀自の長逝を哀悼し慕しく弔意を表す

青物町親交會

◎ 弔詞 弔詞

辯護士にして特許辯護士たる吉田珍雄君慈母鈇子刀自は高須須の藩に生れ吉田家に嫁す天資温厚頗る令聞あり内自ら毅然たる操守を持ち専ら佛法に歸依し能く衆に崇敬せらるる又兼れて易道を修め其遺典を究む刀自五男三女あり就中長男珍雄君は夙に辯護士として法曹界に名聲を馳せ又多年公共事業に盡精せるは世の知る所なり、五男五子君は現に海軍中佐にして武名噴々たり一門恒に春風和樂に充つて之れ皆刀自が温良の德積善の餘慶に因らざるべし有可らず何事ぞ人生傷情の事多く一朝の風塵鶴鶴の壽を奪ひ去りて道山に歸られんとは享年實に八十有四一門長者を失ひ兒孫哀痛斷つ嗚呼痛哉謹んで弔詞を呈す慕しくは來り響けよ

悼辭

日本橋區六之部會

子爰歎んで本會々員吉田鈇子刀自の長逝を悼む、伏して惟みるに夫れ本無無窮の大悲は盡十方に遍く九界の群生悉く救ひの御手に漏るる者なからん經に慈眼視衆生是故應頂禮と示し給ふは即是れ也宗祖之を列じて妙法の曼陀羅に文字に五字七字なれども一切衆生の導師なりとの給へり、茲に於て一信清淨の信仰の

吉田珍嬢夫人の母公みまからければ哀悼のこころをよせて歌どもおくりたれど母きみは八十あまり四とせといへる高齡をたもち給ひ大人は五十の辰をさへ越えさせ玉ふまて給ひれもころにかしつきて孝道に心を盡させ給ひしなれどもへばさる覺も孝道に心な盡させ給ひ件ふ人見ても世にいまさはとおもひ出つゝ、と常にうち誦す己が身にたくらべていとうらやましく思ふものからそを聞えさせ侍らなむ大人もいさゝかおもひあきらめさせ給はむ事もありやとかくおぼす

わが事と思ひくらべて老ゆるまで
母につかへしきみそらやむ
飯田 光房

△東海道教報

◎豊橋の教界は今春國友文學士の留録と、もに一大發展の曙光を呈して来たことは前號にも報道せし所であるが國友師の當代式活動振りは豊橋教界を風靡するの概がある。九月十二日、龍之口法華會を修して演說會を開き佐隈氏の所感と國友師の死に對する覺悟と題せる有益なる講話があつて百二十餘名の聽衆を泣かじめ上人の大意に感謝の念を起さしむるものがあつた。次で十五日、婦人會を開いた當教女史の堅實なる信仰の大事なる所以を語り國友師は總體養成の要と祖訓の重すべきを講じて法雨を潤ふし翌二十日、青年會を開きしが集まるもの會員七十餘名國友師は設立の趣旨を述べ參陽新聞主筆伊藤憲次氏は宗教と道徳との關係より説き起して國民道徳の根

△北陸教信

◎越前縣江に於ける日宗青年信解會は各派の有志青年によりて組織せられたるものなるが齋正野口日主師金光孝順師等北陸連教を構として九月五日同會主催の下に龍江辨天座に大講演を開いた。聽衆三百五十餘にして會員開會の辭を述べ金光師は現代信仰の狀態に就て峻峭なる論評を加へ迷妄の信仰は國運の發揚に障害あるを責め正しく日蓮主義に依るべしと誨へ増田師は本宗の權威と信仰との關係を論じ野口齋正は日宗とは何ぞと云へる諸論にて現代の日宗は其失ふ所ある所以を示し日蓮主義の國家人生に直接交渉の存する意義を懇説して日蓮主義の卓越せるを知らしめた。又午後七時より開會したるが聽衆は無慮五百餘名を算し自他宗共何となくこの意氣昂る日蓮主義の旗下に集つたので會員の元氣ある開會の辭を終ると金光師が活ける佛敎と題して日蓮主義と現實人生の交渉を論じ野口齋正は日宗とは何ぞやとの續論にて立正安國の本義活

△京都教信

●本山寂光寺山式 久しく本山法華總本山部長として聲名西都に鳴りし齋正野口日主師は日蓮主義發展の機運に際し帝都教界の人として一昨年來東都に謁を留めしがこのたび寂光寺築壇の職を帯び九月二十八日青山の盛儀を挙げられたりと云ふ齋正が青山の式を行ふの報傳はるや京都各派の本山實主は何れも之に感意を表し青山の式にも參列したりとのことなるが齋正の十數年間における社交が如何に圓滿なりしを知るに足るは勿論なるも若し夫れ宗教的修造の上に融通するを得て合同の握手を爲さば更に一段の光彩を添へて西都教界の活躍を見るに至らんこの事こそ望まじき限りなれ。

◎京都天晴會幹事西村喜一郎氏等の有志は、このたび兒童保護獎勵會を組織し家庭及社會教育の智識を講究發行し進んで善良なる風俗を鼓吹するに盡力しつゝあるが九月一日京都俱樂部に於て大講演會を開いた講師には高島平三郎君の「兒童教育の根本原理」京大講師堂原道夫君の「兒童保護に就て」適切有益なる講話ありて二百五十餘の聽衆は其趣旨を領し入會する者多しと云ふ。

△大阪教信

◎大阪天晴會 九月廿一日午後七時大阪ホテに開催し堀木日蓮君は日蓮上人の人生觀に就て有益なる講話を爲し次に野口日主君は國師論と云へる諸論にて歴史の方面より説き起して法然又は道元を品評し各その人格主義共に我國體に不適應なる旨を明かにし我日蓮上人の人格主義を説いて眞正の國師なるの意義を論じ上人の崇拜者は眞實協力一致して現代の國師の一分なりと自覺して活動すべきを説かれたり當夜は京都天晴會幹事村上龍兵衛君金光孝順君の參列ありていと盛なりしと云ふ

△長州教信

◎長州に於ける朝倉俊達師は能く軍軍奮闘して教線の擴張に努められつゝあるも其布教の方法は時代式にして効果の著明なるものあるべきか少年會を設けて國民道徳の大事なるを諭す處頗る妙なりと稱ふべく「九日」は萩在目前の宗教に依るべきを説き日蓮主義の適切な宣傳を引いて諄々之を論ずること二時間に及

びしも他宗の聽衆はなほ僅ますして傾聴し爾來毎月一回出演を請ふに至れりと云ふ亦如何に感化の深かりしを知るに足る也「十二日」天晴會の例會と合同して龍之口法華紀念會を修し午後一時より吉見俊教氏の御法難の由來を演べ終るや朝倉師は上人の海嶽の恩徳を説いて信徒の心得を示し更に夜に入りては參聽者堂に臨るゝの盛會を極む柳田泰介氏は日蓮上人の自信力に崇敬を拂ひ松本政二郎氏は本佛の大慈悲濟の御はたらきに感謝を表し桂小助氏は日蓮上人の偉大なる人格にあこがれ吉見俊教氏は日蓮主義と反省的修養に對する意見を発表し井上茂氏は上人の活動と性情とに道徳の念をさしげ最後に朝倉師は五濁判に就て上人の稱格が萬世を貫いて高等批判の立場に在る旨を詳論して各宗に一喝を加へたりと云ふ十八日「家庭講話のため田町善甫商店に於て人格養成に就いて一場の講話を爲し克己心も自信力も皆是れ信念教育に依らざれば完からざるを訴へ二十八名の店員は能く之を傾聴して修養に努めつゝありと云ふ二十四日「後岸中日教を妙蓮寺に開く吉見氏の前講ありて後朝倉師は面生慇懃心の文を引いて處世の心得を諭し參詣者法悦に充ちたりと「二十七日」三隅村了性院にて婦人會を開き三業道徳を懇説して婦人の修養を勧め聽衆は皆悉く唱題合掌作禮而去

△岡山縣下監督布教日誌 (隨行員中川孝顯)

八月二十五日 第一部監督布教師能仁僧正の日を以て縣下監督布教を開始され、午後三時岡山信徒に見送られて和氣町に向はる、原

田喜廣師を始め信徒の出迎ひ多く本成寺に入る、午後八時原田師の監督布教の主旨を語らるゝあり予は日蓮上人の信仰と上人の國家觀に就いて説き齋正は國家には國家の中心あり一家には一家の中心あり信仰亦中心なる可給ふことと頗る懇切なりき、閉會十一時、聽衆二百餘を數へぬ。

同二十六日 朝來訪問の客絶えず、信仰の談湧く、午後八時原田師の開會の辭あり予は三千年來東洋道徳を涵養し來たれる報恩報恩の意義を述べ佛敎の四聖を日蓮上人の教に基きて演ぶ齋正は人格修養の根本義と題し世間出世間に亘る修養の根本義を懇説さるゝこと二時間餘、法雨に沾ふ滿堂の家前夜に下らず、近來原田師布教の効果著しく捨邪歸正するもの頗る多し將來有望の地同師の弘教を俟つて法勢の擴張を見るべし。

同二十七日 午前五時起床、山紫水明の吉井河時を俾を驅りて赤松郡周臣村草生久成寺に到る、行程四里、此地は武聖關師の布教經營の効顯の擧れり、五十餘名の小兒會員手に國旗を打ち振りつゝ、途に一行を迎へらるゝこの一隊に導かれて久成寺に着す、午後三時武師開會を告げられ余は信仰の對策と祈禱の意義を語る齋正は法華經の功力は現當二世に亘るものなればとて人生尊重の意義と未來成佛の妙談に二時間の大説法ありき、信仰に燃せる聽者合掌して散す、時に夕陽西山に没せり。

同二十八日 衆に送られて午前八時美作時田郡古々原に赴く吉井川を界に里餘の道程なり

用を設き日蓮主義の本領を發揮して大に聽衆の脚輪を衝き未嘗有の盛況であつたと云ふ

●九月一日金澤市給坂町本長寺に於て開會せり聖照支師は近來日蓮主義の勃興を紹介し田久保日城氏は宗教必要の要領を布演し金光布教師は信仰上における目的安んずるを詳論し野口齋正の國家の發展と日蓮主義とに關し歴史的に説明を興へて覺悟に傾ひするものありき尙二日午後一時より同寺に開き金光布教師の活力ある佛敎と云ふ講話は各方面より法華經の特長を陳べ野口齋正は法華と日蓮主義と國家との融合の意義を論じ閉會を告げたるが兩日とも盛會にて感化の多かりしを認めたり又四日午後六時より工兵大隊にて一場の精神訓話を爲して日蓮主義的武士道を鼓吹したりと云ふ。

